



庄内町 / 鳥海山と水田

群青色の水田 見守る孤峰鳥海山

 庄内銀行

Cradle 5 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2019 May/June
令和元年5月1日発行(隔月奇数月発行)第9巻5号(通巻53号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0236(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・ビルディング」 電話0234(41)0012

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
今井繁三郎と
芸術の森
庄内憧憬
椎名誠 作家

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

5
2019 May/June
TAKE FREE
NO.53



よくワンタンを「雲吞」と書くが、まさしくつるりと呑み込めてしまう柔軟さで、味も素晴らしいものだった。

庄内のあつい思い出 椎名誠

山形は非常にたくさんさんの思い出に満ちた土地だ。1990年代に山形林間学校というかなり規模の大きな催し物が毎年夏休みのさなかに行われていて、全国から2千人ぐらいの若者が入学した。その催し物には多くの名前が冠されていたので、多くの友人たちでアウトドアスポーツや特別な知識、才能のある連中を毎年15名ほど集めて、林間学校の先生として参加してもらった。

これは県と、新幹線が開通したJRの共催によるもので、3泊4日、山形全土でさまざまな教室が開かれた。ふたを開けてみると本当に全国から若い世代が集まっており、女性が7割近くを占めていた。教室は、登山とかカヌーイングとか写真教室、乗馬、ダイビング、山伏修行、木工などなど、毎年13〜15ほどのクラスに分かれ、それぞれ山形全域に散らばって大人の林間学校が開かれたのだった。

庄内地区でももちろん年ごとに場所が変わったが、何かしらの教室が開催され、地元の人などとの交流がそのたびに深まっていた。この大掛かりな林間学校は7年間ほど続き、ぼくは校長として毎年各地を回って乗馬など自分のクラスの先生となったが、毎回最後は全員が集まったの大ファイナルとなるのだった。だから山形と聞くと、暑い夏の日差しと、セミの盛大な鳴き声がなつかしく大きくよみがえる。庄内地区は何かと肥沃な土地であるから、ここで開催する教室はおいしいものをたくさん食べられていいなあ、とこれは林間学校の先生である仲間内でよく交わされた言葉である。

山形各地の中で、ぼくは特に酒田に強い愛着を持っている。ある週刊誌で全国各地を回る旅ルポの企画があり、その折にならばなく酒田の中華そば屋さんに入った。壁のメニュー表にワンタンやワン

タンメンがかなり目立つところに掲げられていたので、ワンタン好きのぼくは勇んで注文した。出されてきたワンタンメンを見て驚いた。よくワンタンを「雲吞」と書くが、本当に薄い生地で肉が包まれており、まさしくソバと一緒につるりと呑み込めてしまう驚くべき柔軟さで、もちろん味も素晴らしいものだった。

いろいろな聞いてみると酒田にはワンタンメンを売り物にするお店がたくさんあるそうで、その秘密は各店が自分のところで薄い薄いワンタンの皮を圧縮する方法で作りにだしているところにあった。とりわけ親しくなった川柳というお店では、ワンタン製作の現場を見せてもらい、以降なにかという親交が続いているのである。



酒田の名物「ワンタンメン」(酒田市 川柳食堂)

しいな・まこと／作家。1944年東京都生まれ。1979年より、小説『天の系譜』で第10回吉川英治文学新人賞、90年『アド・バード』第11回日本SF大賞受賞。主な作品は他に『岳物語』『中国の鳥人』『黄金時代』など。趣味は焼き火キャンプなど。どこへ行くことで、『旅先のオバケ』『おながすいたハラヘコ』②おかわりもつっぱい』『世界の家族家の世界』最新刊の『わが天幕焼き火人生』など。モンゴルやパタゴニア、シベリアをはじめ辺境にいたる紀行文、探検、冒険ものも多数。2019年1月には、鶴岡市「本のチカラ委員会」キックオフイベントに招かれて講演。最新情報は、公式インターネットミュージアム「椎名誠 旅する文学館」
http://www.shina-tabi-bungakukan.com

道は遠い、ゆけどもゆけども遠い道のような。
然しはてしなく遠い道であるが故に、
私のような才能のない者でも
走り続けることができる道ではないのか。

一緒にこの世に生きてきた人々の誰かに
感動を与える絵を描きたい。
描ける絵描きになって死ねないものか。
道は続いている。
その道を歩き続ける私の執念を
人は笑うであろうか。

「今井繁三郎作品集」より



「夢をみる者に終りはない」(2000年)

三 郎 と 芸 術 の 森

特集

今 井 繁

父、今井繁三郎について

画家、今井繁三郎さんについてさまざまな方にお話を聞くと、多作、行動的、ユーモラスでアイディアにあふれ、行動的、早口、旅好き、食事は熱いものを好み、人を愛し、愛された人、など豊かな肖像が浮かび上がってきました。生涯、飽くなき好奇心と探究心で自身の表現と向き合い続けた、その絵の世界を訪ねてみます。

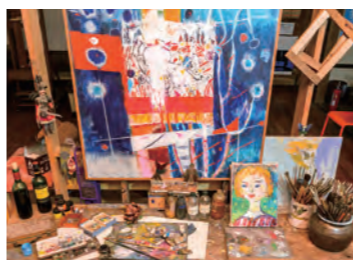


今井繁三郎 略年譜

- 1910年 2月7日、山形県東田川郡羽黒町(旧泉村)戸野に生まれる。
- 1927年 山形県立鶴岡中学校(現鶴岡南高等学校)卒業後、画家を志し上京。芝絵画研究所に入所、山本鼎、山崎省三、木村荘八らに指導を受ける。
- 1936年 鷺田新太の誘いにより美之國社に入社。美術雑誌『美之國』の編集に携わる。
- 1937年 自由美術家協会創立に参加。
- 1941年 10月、美之國社の客員となり、海軍省の従軍画家として南方に赴く。
- 1942年 帰国。7月-9月、満州国に赴き当時の奉天・新京・ハルビン熱河を写生旅行。
- 1943年 銀座村松画廊にて「海南島風物画展」開催。7月、台北・高雄にて個展開催。
- 1945年 終戦。東京を離れて郷里に帰り、山野を拓いて家族と共に住む。
- 1956年 山形県美術連盟運営委員長に就任。
- 1957年 白堊社委員長に就任。
- 1964年 欧州に赴き、パリに滞在。その後、アフリカやシルクロード取材。
- 1976年 美術団体「光陽会」の委員となる。
- 1979年 斎藤茂吉文化賞受賞。
- 1989年 美術団体「光陽会」の委員長に就任。
- 1990年 羽黒町泉野の自宅庭に「今井繁三郎美術収蔵館」を設立。
- 1996年 鶴岡市特別文化功績賞を受賞。
- 1998年 長崎県立美術館にて回顧展開催。
- 2000年 山形美術館にて2000年記念展を開催。
- 2001年 羽黒町名誉市民となる(合併に伴い現在は鶴岡市名誉市民)。
- 2002年 1月9日死去。享年91。

作活動が続けながら、美術雑誌『美之國』の編集長を務め、自由美術家協会を発足するなど中央画壇を奔走した今井さん。戦禍がその生活を一変させ、戦後35歳の時に一家で帰郷。羽黒町の川代山の一角を開墾し、生活と画業の拠点としました。

妻さくさんとの間に授かった四姉妹のうち末っ子の齋藤木草さんは、今井さんと居を共にし、亡き後も作品とこの場所を守ってきました。「父は何事も不可能とは考えない人で、好奇心旺盛で野次馬。桁外れで、私にはそれが普通の父の姿でした。丁々発止とやり合いもしましたが、父の描く絵が好きでね。なぜこの父からこの絵が生まれるのか、その矛盾がずっとありました。頭の中をのぞいてみたいと何度も思いましたね」。四六時中、絵の構想を考えていた今井さんの興味と関心は、庭の草花から世界の貧困問題にまで至り、自



「父は少ない絵の具で多くの色を出す、重ね色の使い方がプロだと思いました」と木草さん。今井さんが使っていた画材は、ovenKatoの店内に飾られている。

羽黒町戸野の造り酒屋の四男坊として生まれた今井繁三郎さんは、旧制鶴岡中学(現鶴岡南高等学校)に進学。「文化と名のついた何ものもない田舎育ちの私にとっては、心をゆさぶる何かがあった」と、絵との出合いを後に語っています。絵描きを志して17歳で上京し、制



ることなく地方での創作活動を選んだ今井さん。自身の美術館とアトリエを設け、庄内に居を構えながら変わらず東京や長崎などで個展を開き、中央に作品を発表し続けました。創作意欲はますます盛んでしたが、卒寿の頃、荘内神社での個展会場で体調が思わしくな

「稲田」
面々と広がる稲田と迫る山、畔(あぜ)の途中の1人の人間と自然との存在感が、対照的な色彩と構図で感情豊かに描かれている。

特集 今井繁三郎と 芸術の森



分の中に彷彿とするイメージとつながり、時に激しくぶつかりながら絵の世界を切り開いていきました。地元の芸術振興にもその熱は及び、美術団体「白堊社」の活動にも尽力。地元と中央との文化交流のパイプ役も担っていた今井さんでしたが、昭和40年に自由美術家協会を脱退します。「絵は誰かに教わるものではない。自由に着想して描き続けている。自分の絵に到達する」とよく話していました。自分は自分の世界で生きたい。父はしがらみや枠を取り払いたかったんでしょうね。」
自分の絵を貫くため、中央に媚び

草さんは病院に連れていきます。診断は末期のがん。病名を伏せて入院してからも、今井さんは病床に画材を持ち込んで絵を描き続けました。91歳、天寿を全うしたその作品は、晩年にかかるほど無垢で精彩に富んでいます。「父は子どもが描くような絵が描きたかったんです。「迷いのない、あの線がほしいんだよ」って。最晩年の作「夢をみる者に終りはない」。後に今井さんが「泉野」と名付けたこの森を「芸術の集まる場所」と語ったその終わりなき夢は、子や孫たちが引き受け、今年も芽吹き季節を迎えています。

「聖少女」

一筆で描いた唇、その筆の勢いが、チャーミングであけっぴろげで色っぽく危うげな少女像を創り出した。「年老いてもこんなふうに生きたい」と語る木草さんの表情と重なる純な作品。



今井繁三郎美術収蔵館 前館長
齋藤木草さん

今井繁三郎さんの四女。今井繁三郎美術収蔵館は平成2年に完成。建物は鶴岡市内に元禄2年に建てられた旧家の蔵を移築したもので、文化財としての価値も見どころの一つ。



特集
今井繁三郎と
芸術の森

拒まず「面倒見がよくて、何でも言える親しみやすさがあった」といいます。時には自宅に会員を招いて芋煮会を開き、写生会をして庭でお酒を酌み交わしながら絵を鑑賞したりと、絵を描く同志としての交流を大切にしています。「先生は『展覧会はお祭りだよ』と言ってる。白麴社は資金がなかったから、昔は看板も自分たちで描いて、ポスターを街の電柱に貼って回って。そうして汗して描いた絵を人に見てもらえる喜び。それを知っていたからこそ先生は私たちに『とにかく絵を描け』と言ったし、自身も多作だったのだと思います」。今井さんは佐藤さんたちに、中央の展覧会にも作品を出すよう勧めることができました。「経費はかかって、立派な美術館の壁面に自分の絵が飾られることは価値

のあること」。その価値を地元にも創り出すと、今井さんは鶴岡アートフォーラムの開館を求め、署名運動を率先します。機運が下がっても「お前さんたちの絵を飾ってやりたい」と言って頑として活動を続けた末、念願叶って着工。しかし今井さんは完成を見ずにこの世を去りました。

佐藤さんは今井さんを「自分で運をつかむ実行力の人」だといいます。「最後の個展で『聖少女』を見た時、今井先生はピカソと並んだ！」と思いました。聖少女は先生の長年のモチーフでしたが、模索を続けたその絵は、それまで見たこともない新鮮な形と色使いでした。ピカソがキュビズムに到達したように、今井先生も自分の絵の道を切り開いてそこにたどり着いたんだと思いました。

白麴社の創設からまもなく100年、「今井先生のような大画家がいたことを私たちが伝えていかないといけない」。今井さんが一心に向き合ったキャンパスは、時を越えてなお生き生きと鮮やかに、今も多くの人の絵に向かう道を照らしています。

佐藤さんが唯一今井さんから譲り受けたデッサン。ある日「絵の具持てこい」と言って色を付けてくれたそう。「この描線の美しさ。今井先生のデッサンが好きな人は多いんです」。



まず色が美しい。今井先生は、塗りとつぶさず色を重ねて、塗りムラの間から下の色がのぞく、色が美しく響き合うような特殊な画法なんです。今井さんは在京時代から白麴社の活動に力を注ぎ、中央画壇の錚々たる画家から作品を借りて白麴社展に展示するなど、地

美術団体「白麴社」の創設は大正13年。今井さんは昭和34年からたびたび委員長を務めた。写真は昭和26年、前列右端は創設者の一人の齋藤求さん、左から3人目が今井さん。

佐藤定雄さんが白麴社の会員となったのは60余年前。17歳の時、初めて行った白麴社展で目に飛び込んできた絵が、噂に聞いていた画家、今井繁三郎さんの絵との初対面でした。「展示作品の中で、今井先生の絵しか覚えていないほど強烈でした。

今井繁三郎さんの画風は、抽象かつ心象的でその類まれなイメージネーションを持つ本人もまた創造と想像にあふれる人物でした。その背中を見て絵の道を歩み、生きる道を学んだ人が多くいます。

画家としての肖像



「二段ベッド」
やわらかく投げ出した足と、硬いベッドとを対比させるような青と黄。「今井先生のユニークな視点と色彩が生きた面白いモチーフ」と佐藤さん。



昭和54年、今井家の庭での芋煮会。今井さんは頭に手ぬぐい姿で鍋を用意して振る舞ってくれたそう。

白麴社前委員長
佐藤定雄さん

17歳で白麴社に初出品、「市長賞」「白麴社賞」などを受けて昭和31年に会員に推挙。平成19年から22年まで委員長を務める。佐藤さんのイーゼルの脇には、尊敬する今井さんの写真が飾られている。なお、5/7~12に「佐藤定雄洋画小品展—庄内美人図とふるさと風景—」を鶴岡市のぎやらいい真しまで開催(問：0235-22-8239)。



特集
今井繁三郎と
芸術の森



共同作品「方舟計画」／「東北から未来に遺していきたいもの」をテーマに東日本大震災が起きた平成23年に描かれた「東北画は可能か?」の共同作品(幅3m80cm)。当時学部4年生だった綾さんも参加した。



「私も含め芸工大の学生も都会の大学に行く選択肢もあった中で、あえて東北を選んだわけです。今井さんもまたこの地で描く選択をして生きました。その意味で、私たちが今井さんから学ぶことは大きいはずだと、そして何よりこんなに面白いことをした方がここにいて、そのことを未来へ引き継ぎながら何かしようと集まっている人たちがいる。その場所と人に、東北画の後輩たちをつなぎたいと思ったのです。」

東北芸術工科大学で10年前から行われている課外活動団体「東北画は可能か?」のメンバーが、羽黒・芸術の森に関わるようになったのも同年秋のこと。鶴岡アートフォーラムで翌年に開催する展覧会準備に訪れたメンバー10名を、綾さんは今井

東北画は可能か?

平成21年に日本画コースの三瀬夏之介教授と洋画コースの鴻崎正武准教授によって旗揚げされたチュートリアル(課外活動)。東北における美術の可能性を考えながら、学生と教員が作品制作と発表を続けている。

仙台市郊外の山麓で育った渡辺綾さん。学生時代に「山」をテーマに表現活動をするようになり、卒業後は出羽三山信仰のお蔭元、鶴岡市へ。羽黒町の日帰り温泉施設で月山の絵と対面し、それが今井繁三郎さんの絵との最初の出合いとなりました。「実はそれまで今井さんのことを知らなくて。でも、一見すると普通の風景画に見えるその絵は、初めて見た時から、本物の月山だ、すごい」と感じていたのです。後に、今井さんは山を描く時、山の向こうにある生活もイメージしながら描いたというお話を聞き、私もその気持ちを忘れてはいけないと思いました。」

平成27年8月、綾さんはふとした縁から、今井さんの親族が中心となって開催した「羽黒・芸術の森」の清掃活動イベントに参加。以来、今井繁三郎美術收藏館再開の方法を模索する運営会議に進んで参加する

東北で絵を描くこと

今井繁三郎さんが亡くなってから14年後の平成28年、1人の若き日本画家が今井繁三郎さんと東北芸術工科大学の学生たちを引き合わせました。今年3月まで鶴岡に住んでいた渡辺綾さんです。



「月山」
綾さんが好きな今井作品。白銀に輝く月山と麓の桜並木が幻想的に構成され、「風景画に見えるけれど抽象画」という今井流表現を体現している。

ようになり、收藏館を「今井アートギャラリー」と改名した28年春には同ギャラリーでグループ展を開催しました。



展覧会「森のコトノハ、野のイロドリ」(今井アートギャラリー)／平成29年7月開催の「東北画は可能か? ~地方之国構想博物館~」(鶴岡アートフォーラム)の同時開催展。綾さんが今井作品と東北画メンバーを引き合わせたことで実現した。今井さんの作品とそれにインスピレーションを受けたメンバーの作品を並べて展示。写真は渡辺綾さんの展示風景。

日本画家
渡辺綾さん

東北芸術工科大学 修士課程 芸術文化専攻日本画領域を修了した平成26年に鶴岡に移住。会社勤めをしながら「山」をテーマにした表現活動を続け、羽黒・芸術の森運営会議にも参画。今年3月末に活動拠点を故郷の仙台市に移す。

以来3年、「東北画」はメンバーを新たにしながら画家今井繁三郎を掘り起こし、発信する作業を継続。今年4月には東京の佐藤美術館で同大学院生のグループ展にユニット参加し、今井さんをテーマにした企画展示を行っています。「画家にとつて生きていく場所というのはとても大きくて、なぜそこで描いているのかという問いは、今井さんもずっと抱えていたと思うんです。今井さんは東北で絵を描く私たちの一つの指針だと感じています」。今後も今井アートギャラリーで定期的に個展を開きながら「奇跡的につながった羽黒・芸術の森との縁」を続けていきたいと話す綾さん。今井さんの作品との対話を通して、その気概を引き継いだ若き表現者が、今後どのような活躍をするのか楽しみです。



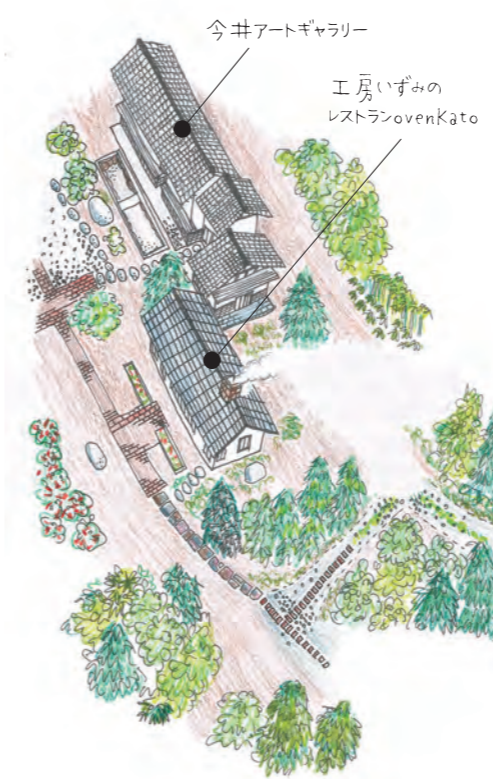
羽黒

芸術の森へ

今井繁三郎さんが生前「泉野」と名付けた旧美術収蔵館などがある、森に囲まれた自然豊かな地。祖父の生前の夢を引き継ごうと、孫たちによる「羽黒・芸術の森」への歩みが始まっています。

月山麓に広がる田園地帯の小さな森。今井繁三郎さんが泉野と名づけたこの地を「羽黒・芸術の森」という一つのフィールドにして、敷地内の今井繁三郎美術収蔵館を「今井アートギャラリー」に、アトリエを「工房いずみの」にリニューアルオープンしたのは平成28年春のこと。設立趣意書には、「羽黒の山林を開拓し、郷土に根差し、その風土を背負いながら創作を続け、あえて地方から中央へ発信し続けた今井繁三郎の意思」を受け継ぐことが記されています。作成したのは「羽黒・芸術の森」運営会議の皆さんです。

旧今井繁三郎美術収蔵館は今井さんが平成14年に亡くなって



「羽黒・芸術の森」の俯瞰図。秋野わかかなさん作。



以降、四女の齋藤木草さんと、木草さんの次女で鶴岡市加茂に住む秋野わかかなさんが開館業務を続けてきました。しかし、木草さんが鶴岡市内に居住を移した数年後の26年秋、継続的な開館が困難となり休館を決意します。「維持管理だけでも大変な上に母も高齢となり、私も子育てと重なり負担が大きくなってしまつて。当時は母の気持ちを尊重して閉館の道も考えていました」とわかかなさん。



今井作品が常設展示されている今井アートギャラリー。

酒田市に住む木草さんの長男、齋藤健太郎さんはその意向を受けて、叔母である四姉妹といここ、美術館の再開を切望する人たちによる話し合いの場を設けました。「祖父の孫は全員で13人です。私たち兄妹以外は東京に住んでいて、子どもの頃は夏休みになると毎年羽黒に集まって遊んでいました。大人になつ

てからもそれぞれが遊びに来ていて。そういう思い入れの強い場所だからこそ、簡単には結論が出ませんでしたね」と健太郎さん。そしてその中で出た、「おじいちゃん公の人だから身内の判断だけで美術館をなくしてはいけないのでは」という意見を機に、話し合いは運営を継続する方向へ。親族とゆかりの人で「羽黒・芸術の森」運営会議が発足しました。

特集 今井繁三郎と芸術の森



平成27年8月、SNSなどで参加を呼びかけ、プレオープンのための清掃活動を実施。すると予想を超える数のボランティアが集まりました。受付業務を



「国なき民Ⅻ 飢餓」
自国を追われた流浪の民や飢餓に苦しむ人々を通して、弱者への寄り添い、戦争や権力への憤りを描いたシリーズ作。「羽黒にいながら世界を見つめていたその視点がすごいと思う」と齋藤健太郎さん。

特集
今井繁三郎と
芸術の森



「溶鉱炉」

「ここではね…」とまるでおとぎ話のように話してくれたという晩年の作。「溶鉱炉という言葉には、きっといろいろな意味が込められていると思います」と秋野わかかなさん。



「無題」

「いろいろな人生が凝縮されている集合住宅のよう」と作品について語る東京出身の加藤博紀さんは、人生初の田舎暮らしを満喫中。



「蝉しぐれ」

加藤さんご夫婦が吉祥寺のお店に10年間飾り、鶴岡移住とともに里帰りした作品。「お客さんからこの子と私が似ているってよく言われていました」と加藤あさ野さん。



旧鶴岡裁判所の執務室を移設した工房いずみの。現在はお店とアトリエを併設している。

【羽黒・芸術の森】

鶴岡市羽黒町仙道字一本松5-175

今井アートギャラリー
開館／4月中旬～11月下旬 10:00～16:00
休館／月曜(臨時休業あり)
維持管理協力金／
大人500円、学生300円、小学生以下無料
間／0235-62-3667

ovenKato(オープンカトウ)
営業／4月中旬～11月下旬 11:00～16:00
定休／月曜(臨時休業あり)
間／0235-64-8663

は私たちだけででしたし、子どもたちも自立していますから、それならばと移住してお店を始めました。ここに美術館があることに初めて知ったという方も結構多くて、私たちの最大のミッションは、祖父のことを知らない世代の方々にも知ってもらうことなので、庭に散策路を設

けるなどさまざまなことに取り組みながら、あそこに行くという面白さ、というところから、子どもたちの頃から心のどこかでずっと住みたいと思っていた場所に、今こうして住むことができて毎日幸せ、と話すあさ野さん。おじいちゃんが残してくれた場所だからこそ、自分たちが活動できる。それはとても恵まれていること、と話す健太郎さんとわかかなさん。「衣食住足りれば人は生きていけるが、心が動かないと本当の人として成り立たない」というおじいちゃん「の言葉を受けて、人が人として生きるための場所を目指し、誕生した「羽黒・芸術の森」は、孫たちの新たな夢となり、未来への時を刻み始めています。

「とにかく祖父は常に未来を見据えている人でした。本人は死ぬ気などまったくなく、まだまだ自分はやれると思っていたはず。その思いを私たちが引き継いで、祖父のビジョンを次の世代につなげていきたいです」(わか)

「自分たちがやらなければ」という気持ちしかなかったのが、ボランティアの方々が楽しみながら作業をしている姿を見て、初めて人に頼っていいんだと希望を持ちました。母も泣いていました」とわかかなさん。

たのです。オーナーはいとこ会の一員で、当時東京・吉祥寺で飲食店を営んでいた加藤博紀・あさ野さん夫婦です。「美術館以外にもう一つ二つ人を呼べるものがほしいという話があった、その中で祖父がここに飲食ができる場所をほしがっていたという話が出たのです。いとこの中で飲食関係の仕事をしているの

担う人たちの助けを借りて、週末の開館も実現。翌春のリニューアルオープンに至ります。「この時、運営会議に参加している渡辺綾さんたち4名がグループ展を開いてくれました。その姿を見て、やっていたける」という実感が湧きました」と健太郎さん。「それまでは

「羽黒・芸術の森」運営会議の核となっているお孫さんたち。手前から右回りに齋藤健太郎さん(四女木草さんの長男)、秋野わかかなさん(四女木草さんの次女)、加藤博紀・あさ野さん(あさ野さんが三女萬里野さんの次女)。





モアレの アスパラジェラート

酒田の中心市街地、中町で
25年前から中高生を中心に愛されてきた
青春の味に、地元食材を使った
フレーバーが続々登場中!

若葉を思わせるライトグリーン。一口食べれば
まろやかな甘みと青々とした風味が口中に広がり、
さわやかな気分になる。毎年4月から6月に登場
するモアレのアスパラジェラートだ。

ジェラートとはイタリア語で「凍った」という
意味を持つ氷菓のこと。アイスクリームより乳脂
肪分が少なく、空気含有量も少ないため、ヘル
シーでかつ素材の味をより楽しめるといふ特徴を
持つ。酒田中町のモアレが開店したのは平成6年。
まだジェラートが今ほど広まっていなかった時代、
創業者の菅野信一さんが、「中心商店街に子ども
がお小遣いを握りしめて買いに来れるお店を作り
たい」とジェラートに着目したのが始まりだった。
以来イタリアから仕入れた素材で作る本場の味や
抹茶、ごまなどの通年ものに加え、月替りで登場
する地元のイチゴやメロン、だだちや豆、つや姫
といった旬の農作物のジェラート、はたまた生ハ
ムや味マルジュウといった変わりダネまで常時20
種類を店内で手作りし、提供し続けてきた。2代
目の菅野弘幸さんいわく、「地元の人が何度も通
いたくなる、普段使いのジェラート屋」という創
業時からの変わらぬコンセプトが、とどまること
のない商品開発の原動力となっているのだそう。

7年前に生まれ、この時期の定番メニューと
なったアスパラジェラートの材料は、庄内砂丘育
ちのアスパラガス。5月は他にも黒ビールや酒田
祭り用祝い酒なるフレーバーが期間限定で登場し、
その都度ショーケースは色とりどりに変化する。
中には一度きりしかお目見えしないものもあると
いうから、これはマメに通ってチェックせねば。



ジェラートはシングルのほか、ダブルとトリプルも。写
真は右からいちごシャーベット&レモンシャーベット、
チョコレートモアレ&マラガ、抹茶&アランシアの組
み合わせ。店内にはランチタイムのみ営業している
食事コーナーもあり、ジェラートとパスタをセットで楽
しめる。住所／酒田市中町1-7-18 営業時間／
10:00～21:00 定休日／無休
カフェ ジェラート モアレ ☎0234-22-5280

(取材・文 長谷川結)



旧郡役所の中庭

現在館内では、国内有数の米どころである藤島地域の藁文化を紹介している。しめ縄や苮、草鞋、バンドリ（背負い作業用の背当て）など、人々の暮らしの一端をうかがうことができる。また、この地域には田畑の悪霊を祓う祭りとして数多くの獅子踊りや神楽が伝承されてきた。古くから獅子郷と呼ばれてきたこの土地ならではの祭具が、訪れる者の目を楽しませてくれる。

百年の硝子に若葉優しかり

—あべ小萩

観は和風建築であるが、ロの字の中庭では、季節ごとに色を変える山法師が眩しい。百年以上経った今でも色褪せない当時の職人の技と想いに感動を覚えた。



旧東田川郡役所と郡会議事堂

庄内俳句紀行

風薫る
東田川文化
記念館を歩く

庄内平野の早苗田を渡る風が
頬をなでる頃、雪溪の美しい雄大な
鳥海山を眺めながら車を走らせた。

桜草飾る明治の郡役所

—阿部月山子

郡役所の脇で枝垂桜の若葉が風とささやき合う。建物の設計及び施工は、この時代の庄内を代表する名棟梁、高橋兼吉による。高橋は同時期に、旧西田川郡役所および旧鶴岡警察署庁舎、大宝館や善寶寺五重塔など鶴岡のシンボルとなる建築を手掛けている。郡役所は縁側を設けた外廊下と外周一面に硝子窓が並び、外

いにしへの白き洋館風薫る

—水内慶太

青空に映える白く堂々とした議事堂は、美しいコロニアル様式の建物である。1階の座敷の部屋は現在、図書館となっていて、畳に座っての読書が居心地よい。2階は一転してモダンな雰囲気。シャンデリアと窓が洋風の造りになっており、「明治ホール」の名で、コンサートや講演会などに使われている。

ざぶざぶと白壁洗ふわか葉かな

—小林一茶

昔からある建物、当たり前にあつたものを、じっくりと時間をかけて見る。そこにある歴史を紐解くことで、見えてくるものがある。令和の時代に何を残していくのか。あらためて考える時間は、己との対話の時間ともなる。

記念館近くの藤島城趾に立ち寄ると、樹齢幾ばくの櫟が枝葉を大きく広げ、木洩れ日と共に包み込んでくれた。5月半ばともなると、このあたりは藤の花が満開となる。再びその花時に、歴史の風薫るこの地を訪れてみようと思う。

写真・文||あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)



藤島城趾の櫟



明治ホール



藁細工

季語
風薫る
(かぜかおる)
青葉若葉を渡ってくる
爽やかな風が初夏の香
りを運んでくるさま。